

大阪みやげ

滞在僅に一週間、其交際の範圍もまことに限られて居る、従つて、其土産といふものも、まことに金のかゝらない、ケチな御品物と御承知を乞はねばならぬ。

夏の大坂 東京の夏を知る者には、容易に大阪の夏の如何が推知せられよう。櫛の齒の如くに並んだ瓦屋根から照り返す夏の日の熱さ、空を衝いて屹立せる幾多の烟突から吹きでる煤烟、肩摩穀撃たる心齋橋筋、千日前の人波、以て空気を洗ふべく以て人目の疲労を助くるに足るべき緑樹の缺乏せること、凡そ之等の要素は、此頃の大阪を想像するに足るべき好個の材料である。但しかく一概にいつて仕舞へば夏の大阪たるもの如何にも殺風景極まるものであるが、然も、所變れば品變る、

他の都會に在つて容易に見るべからざる夏の風景は、所謂

納涼船 である、納涼船は夏に於ける大阪人士唯一の娛樂と見える、人若し試に行いて、淀川の畔天神橋、難波橋の際に立たんか、片舟に行燈として、三人五人の男女乗り合ひたるもの陸續として河下より遡りては此處に集まり、遂には川の一面に行燈の火で覆はれるのを見るであらう。これは確に東京邊りでは、さう簡單に得られぬ夏の夕の遊である。之に因みていふは

納涼臺 である、中の島の東の端に當つて、大凡そ六七十間の長さの臺を造つて、川中に突き出して居る、此處に遊べば、新聞縦覧所あり、棋會所あり、射的場あり、落語あり、而して氷店、而してピーヤホール、入場料三錢を拂つて、蒸される

棧橋は長さ二百五十間、幅十五間、若し此工事の完成出来た曉は、市の壯觀、はた幾倍の光を増すであらう。

此築港は、今の處では一の納涼場となつて居るのである、而して、茲に至るには凡そ一里許り、新開の大道路一直線に通ずる所に電車を運轉して居る、東京市のよりは、速力も早くつて、夫に、二階附の電車などがあるのは一歩進んで居るといはねばならぬ、夕景からかけてそこに行く、さすがに遠く隔たつてゐるから、彼の納涼臺から見ると雑沓が少くつて、且つ何しろ、海中だから遙に涼し、橋の兩側には、蹲居して太公望を氣取るもの、三々又五々。其尖端には、ピーヤホールあり以て簡単に夕食を認むるを得べしである、夕食の序に豫ねて、世の諺にまでなつて居る、京の衣倒

れ、界の建て倒れ、

大阪の食ひ倒れに付きて、所の人士の説を聞いた、大阪の食ひ倒れ、一寸聞くと、東京邊りて言ふ食ひ道樂と同意義に聞かゆる、料理のハイカラを尊ぶといふ風に取りれる、が、事實は全く違ふ、食物の味を吟味して、どこまでもハイカラ的に料理に金をかけるといふよりも、寧ろ、不味くつても量の餘計なるを尊ぶといふ意義である、故に、ピーヤホールに入つても、必らずしもカツフキーを望めない、況んやケーキをや、更に況んやスーブをや其代り、以て腹を肥すべき料理は敢て心配するには及ばない。

ピーヤホールの咄の序に、尙一つ他郷人の目に付くものを紹介しよう、他でもない、之等のピーヤホールとか氷屋とかに於ける

給仕女の服装 である、蓋し蝦茶式部といふ語を以て、當今の女學生の一名とするのは、少くとも、此大阪に於ては通用しないのである、如何となれば、當地に於ける之等の給仕女は悉く蝦茶袴を着用して居るからである、先年の博覽會の遺物と稱するものが甚だ多いのであるが、給仕女の蝦茶袴も亦其一たることは、識者の夙に了知せられる所だと信ずる。

人力車 賃錢の廉なのと足の疾いのは、夙に大阪人力の特徴であつたのだが、今日に於ては、少くとも、其一特徴は失つた、詳にいふと、賃錢はこゝ十年前から見ると、大方五六倍の騰貴だ、而して、昨年の博覽會以後は更に著るしく上つたといふこと、但しさすがに、車夫の足の疾いのは心地がよい、此點につきては、概して言ふと東京の

車夫は比較にならない。

大阪人の美點 勿論一二では足りまい、而し、其中の一として記憶に留つたのは、一般に祝日大祭日を尊重することで、此日には、大抵お休みにする、一體、大阪人士は、遊ぶことも遊ぶが、其代り働くことも随分働く、つまりよく勉めよく遊ぶ方だといふ話し、時局に際しても、勿論多少の影響は受けて居るに違ないが、大した困窮者も出ないといふのは、一は之が爲でもあろう、(未完)

宮城縣保母養成所

同縣師範學校内に開きたる同所第一回卒業生の實地保母は、其兒童二百名に及び非常の好成績にて先月二十二日終了せりといふ。